

## 『源氏物語』にみる「物語の論理」

——女三宮造型の意義をめぐって——

女三宮降嫁の過程には光源氏の須磨流謫や藤壺との犯しなどの物語の主軸部と同様に、あいまいな表現が多く、作中人物の意志や感情に、物語展開の原因を求めつくせないが、その不透明さを貫く

(一つの方向に向かって読者に読まれる)「物語の論理」を見出せる。「物語の論理」の核は独自の「一世源氏」として造型された光源氏の優越性を確認し、相関的に朱雀帝の弱体が確認されることである。第二皇子である光源氏は母の出自が低く、後見が弱いために立坊しえなかったというだけではなく、世俗的秩序には脅威的なまでに輝かしい資質をもちながらも、帝位に即けば「乱れ憂うること」が起こり、かといって普通の臣下にはとどまらないという不可思議な運命に対する桐壺帝の察知によって、やむなく臣籍降下された。また史実上、日常的にありえぬ官歴を経てゆくことを含めて光源氏の臣籍降下は物語世界における光源氏の根本的なあり方を示す

『源氏物語』にみる「物語の論理」

松 田 薫

ものであり、史実上の一世源氏そのものではない。<sup>①</sup>  
本論では女三宮自体に焦点を当て、「物語の論理」との関連からどのような造型の意義をもつのかを考察する。

一、「物語の論理」にそくした女三宮造型

① 内親王の歴史社会的特質と女三宮

『源氏物語』に登場する主な皇統の女のなかで内親王の藤壺や王女の秋好は入内し立后している。撰関期にこのような例は稀少であるが前者は桐壺帝が冷泉帝の立坊を保障するために行い、後者は光源氏が冷泉朝の安定を保障するために御子のいない秋好中宮の立后を強行するなど、物語は独自に源氏系の立后を描く。また王女の朝顔齋院は光源氏を拒否し、紫上は光源氏に養育され最愛の人となる。このように皇統の女は画的には描かれていないので若菜巻におけ

る内親王降嫁もまた重要な意味をもつはずであり、たんに帚木巻の雨夜の品定めにある「上が上」<sup>③</sup>の品の女の具体例で、かつ父上皇に鍾愛される皇女の場合を描き、女の生き方を問い直すためだけの設定であるとは考えられない。

事実上の内親王の結婚状況について今井源衛氏の整理に従えば、桓武朝から花山朝において「総数一六四名の皇女の中、有配偶者はわずか十五%にあたる二五名にすぎず、八五%までは定まった夫をもつことなく生涯を了えたこと、次に配偶者の約半数が天皇であること、さらに臣族降嫁のことが醍醐朝に入ってにわかが増していること」がわかる。さらにこの入内例について角田文衛氏の考察に従えば、そのほとんどは天皇からの寵愛も受けず、藤原氏の娘達に圧倒されていたことがわかる。<sup>④</sup>

つまり、入内させる皇家側も降嫁を受け入れる摂関家側も内親王を再び皇統に組みこむ（国母とする）<sup>⑤</sup>ことを前提としていなかったものであり、内親王は皇統に生まれながらも皇統に関与することが困難だったといえよう。しかも大半が独身で生涯を終えることを余儀なくされていたわけであるから、内親王は一族の血を継承発展させる可能性が薄く、その意味では一族との一体感が弱く、当時の宮廷女性としては自己の存在に深い不安を抱いていたと考えられる。このことが内親王の歴史社会的な面での特質として重要なことではな

いか。

確かに女三宮のモデルを史実に求めるには限界があるが、かといって史実を全く無視して「悲劇的といふ美的範疇」<sup>⑥</sup>の主題が必要とした造型、あるいは記号的な存在だととらえてしまつては物語で最終的に六条院に導入されて光源氏とかかわる女がなぜ内親王なのかということが明らかにされず、平安朝に生み出されたこの物語の独自性を真に究明するうえで適切とはいえない。それよりも先述した事実の内親王の特質がふまえられた女三宮が、若菜巻までに登場した他の女達の空虚な思いを象徴するべく造型されている点を重視すべきだろう。降嫁決定の過程には登場せず、登場後もその実体がきわめて受動的姿勢に描かれ、思いを欠くという様子は女三宮を一個の人格というよりは、むしろ生きる前に空虚な思いを先どりさせられた存在だととらえる方が自然であり、一見魅力に乏しく不可解な形象の中にこそ造型の本質的な意義を探るべきではないか。

物語の主軸部にかかわる人物造型は歴史社会的な面での特質が生かされ、しかも「物語の論理」にそつた独自の造型になっている。たとえば光源氏の須磨流謫をめぐるの尚侍朧月夜、弘徽殿太后、朱雀帝の造型である。朧月夜と光源氏の密会露頭・弘徽殿太后の激怒・光源氏の自主的須磨退居・朱雀帝の意向による光源氏の召還と官位復帰・朱雀帝の病と讓位・弘徽殿太后の病と動搖など一連の展

開の原因を人物の意志や感情によって説明するには限界がある。が、それらを軽視して貴種流離譚の構造を指摘するだけでは真に読んだことにはならない。

尚侍は基本的には官女であるが摂関期には皇妃への可能性を孕みつつあったので権力いかんで命運を左右される幅をもつ点が歴史社会的な面での特質である。が、物語では朱雀帝は臘月夜は官女であるからことさら咎める必要もないと判断して、光源氏との交渉に寛大な態度を示し、また光源氏も須磨退居に際して「あやまちなけれど……」と語る。このことは弘徽殿太后の心中に臘月夜を妃候補にという願望があったにせよ、光源氏を謀叛者と見るほどまでに激怒する姿の異様さをきわだたせている。つまり、独自の「光源氏」に脅威を感じて須磨退居への間接的原因を生み出すという逆説的なかたちで光源氏の優越性を確認するべく機能する弘徽殿太后の造型がある。一方、朱雀帝は光源氏の優越性に屈し、立后も成就しえぬまま結果的に中宮不在の王朝という弱体をきわだたせる。たんに意志薄弱な朱雀帝、当時の摂関家の陰謀を髣髴とさせる女傑・弘徽殿太后として写実的にあるいは人物の性格の多様さを主眼に描かれているのではない。とくに焦点である尚侍臘月夜は思慮の浅い官女として描くのが主眼ではなく、皇妃への可能性を孕むという事実上の流動的な特質が物語に生かされ、それが光源氏の優越性を確認する

べく機能するところで独自の造型になっている。

以上の人物造型の方法から考えると、今井氏が注目された史実上の醍子内親王の陽成一世源氏清盛への降嫁例も女三宮降嫁に直結しない。光源氏が皇族出身で高官位であることを頼みに、朱雀院個人の所望から婿に選んだのではなく、光源氏を臣下だとする思いと絶対讚美とが表裏一体になっている屈折した思いが反芻されるなかで光源氏への降嫁が必然化してゆくのである。従って、物語始発から一貫する「物語の論理」の中で女三宮像をとらえる必要がある。

## ② 桐壺卷冒頭と若菜卷冒頭の照応性と異質性

降嫁した皇女の母の多くは更衣かまたはそれ以下の身分であるので、劣り腹で鍾愛を受けなかった皇女が降嫁されていったと考えられる。では物語の朱雀院の女三宮への執着をどのようにとらえるべきだろう。朱雀院の女二宮への処遇と比較すれば女三宮鍾愛の理由として、女三宮の母・藤壺女御（以下母妃と記す）の出自の低さからむ、母妃への寵愛と「片なり」である女三宮への心配の二点を指摘できる。

その中に藤壺ときこえしは、先帝の源氏にぞ、おはしましける。まだ坊と聞えさせしとき、まゐりて。たかき位にもさだまり給ふべき人の、とりたてたる後見もおはせず、母方も、その筋となく、

ものほかなき更衣腹にてもし給ひければ、御まじらひのほども心ほそげにて、おほきさいの、内侍督を、まゐらせてまつり給ひて、かたはらに並ぶ人なく、もてなし聞え給ひなどせしほどに、けおされて、みかども御心の中に、「いとほしき物」とは、思ひきこえさせ給ひながら、おりさせ給ひにしかば、かひなく口惜しくて、世の中恨みたるやうにて、亡せ給ひにし、その御腹の女三宮を、あまたの御中に、すぐれて愛しき物に、おもひかしづき給ふ（圈点・傍線は松田による）

というこの若菜巻冒頭に「冒頭の話型、発想の類似と父の子に対する鍾愛という構想の主軸」<sup>⑩</sup>を指摘されることをはじめ、桐壺巻冒頭を想起できるとされる論は多い。確かに桐壺巻冒頭との照応性は認めるが、諸論がほとんど触れておられぬ母妃の死の実態は果して、「桐壺更衣の場面のようなあるいはそれ以上の朱雀院の寵愛をめぐる争闘」<sup>⑪</sup>の末の「非業の死」<sup>⑫</sup>というほど桐壺更衣の場合に相応するものだろうか。aを諸注釈は「立后なきこと」と関連させて解釈しているが立后不可能となった理由についての検討が不充分である。

母妃と承香殿女御との間に朱雀院の寵愛をめぐる争いはあったと解釈してよいが、当時のリアリティに照らせば、承香殿女御の皇子と皇統譜に関与することが困難な皇女とでは対立のしようがないわけだから、この争いは桐壺巻での第一皇子の母・弘徽殿女御と第二

皇子の母・桐壺更衣の争いとは異質である。

史実上の立后は立坊を保障する目的の場合が多いが、物語でまだ御子を産まぬ前から朱雀院が母妃を立后させようと考えていた、あるいは女三宮の次に皇子を産むことを期待して立后させようとしていたとたとえ解釈するとしても、母妃は朱雀院の寵愛において承香殿女御ならぬ臘月夜尚侍に劣ってしまった（b）のだから桐壺帝が出自の低い桐壺更衣に寵愛を貫いたような強い意志や緊張感が朱雀院には窺えない。また朱雀院の退位についての叙述dがはさまれているので、朱雀院は母妃が臘月夜尚侍に圧倒されたことを気の毒に思ったにとどまらず、立后の困難さを無念に思っていたとcを解釈できそうであり、同様に母妃もまた男女の中という意味での「世の中」を嘆いたにとどまらず、立后の困難さへの失望のうちに死んでいったとeを解釈できそうである。が、朱雀院は死後の母妃に対し何ら厚遇をしていない。立后への願いが強かったのであれば退位後でも故母妃に対する贈位あるいは手厚い鎮魂を行ってもよいはずであろう。これは桐壺帝が故桐壺更衣に対し「女御と言はずなりぬるが、飽かず、口惜しう思さるれば」と三位の贈位を行ったことと対照的である。

以上のように若菜巻冒頭は桐壺巻冒頭と照応しつつも皇位継承にからんだ緊張感が欠如し、母妃立后の計画も窺えぬという点で、そ

の質を異にしている。もし、たんに一部世界（明）から二部世界（暗）へと六条院世界の崩壊や光源氏の否定を描くために女三宮が六条院へ導入されるのであれば、ことさら母妃の出目に触れて桐壺卷冒頭に照応した設定をする必要性は少ない。この設定の意義は本論①で指摘した史実の内親王の特質をその典型として女三宮造型に生かし、しかも桐壺朝と対比して朱雀朝の弱体を確認することにより、登場前の女三宮に決定的な不安を強調することではないか。

### ③ 六条院の正妻格としての女三宮

光源氏は正妻葵上の死後、公の婚儀をしていない。紫上に対しても然りである。須磨流謫の頃、紫上に領地や留守宅の管理などの実質的な家刀自の側面が窺えること②④について秋山虔氏は「光の政治的世界での凋落期にこそ——つまり私人として解放される光が描かれる時にこそもっとも自然に紫上は光源氏につながる正妻格に位地<sup>ゐ</sup>するを得た」と、紫上が光源氏帰京後、実務面と光源氏の意識面において「正室」たるゆえんを説かれた。これは光源氏と紫上の関係の特徴を鋭くとらえられた論であるが、史実の婚姻形態上の正妻や嫡妻の概念と光源氏の色好みや六条院世界の特質からの検討が不十分である。

高群逸枝氏によれば、師輔の時代までは「通ひが基本」である

「前婿取婚」で、妻妾は不分、「むかひめ（嫡妻）」とは婿住み同居中の妻の意で終生的なものではなく恣意的、一時的なもので一人、また「もつめ（本妻）」は複数であり、無嫡庶子の現象があったとされ、道長の時代から意識的に妻妾の区別が芽生え、婿の生涯住みつきが現実化してくるとされる。また『源氏物語』の女三宮、紫上については順位不同と判断され、紫上が「北の政所」と呼ばれたのは源氏と同じ対に同居している刀自格の女ゆえであり、位の有無に関係なく財産のあるところ、ひいてはそこには政所が設けられたのは花散里の場合も同様であるから、紫上は基本的には妻妾格にすぎないとされることに従いたい。⑤

さて、光源氏の色好みの特質は正妻葵上の存命中で六条御息所とも交渉のある頃、出逢った夕顔に惑溺し夕顔の頓死に際しての悲嘆は激しく、故葵上にさえなかつた正妻格並みの鎮魂を故夕顔に行っているところ⑥⑦によく表れている。左大臣家という権門の娘葵上との婚姻は、帝位に即くことを超えるほどの資質をもちながらも即位しえないという物語独自の「一世源氏」が宮廷社会で生きぬくための基盤であると同時に、左右大臣家抗争の渦中にまきこまれることを意味する。ゆえに世俗的秩序に規制され、正妻以外との交渉「しるび」でさえも六条御息所との場合のように桐壺帝が奨励し世間も公認する通い所では、光源氏には常に煩わしさがつきまとう。それ

に比べて夕顔や空蟬との場合のような「かくろへごと」では全く私人となつて情熱を傾けてゆける。このように自らを世俗的秩序から解放するべく、懸想の対象にむかうことが禁忌や危険性を帯びていなければならないほど求めようとする「癖」に基づくという独自の好み、いわば一種の価値感によつて選ばれた女達が六条院に配置される。

六条院世界のあり方は常に宮廷と緊張した依存関係をもち、実質的にはその権威や文化は宮廷を凌ぐにもかかわらず、ついに宮廷、皇系ではありえないというもので、物語独自の「一世源氏」のあり方と共通している。ゆえに公認されない女達を配置しみやびの営みをくりひろげ輝く世界を形成することこそ六条院のあり方にふさわしい。これは当時の婚姻形態の面からは「本来的に公でない例外上、便宜上の婚姻」という「すゑ」の状態だと考えられるが、桐壺巻末で藤壺への思慕とげられぬ苦悶から光源氏が洩らす「思ふやうならむ人をすゑてすまばや」という願望の延長線上に位置するという意味では物語独自の世界だといえよう。

以上のように史実の婚姻形態から考えても女三宮降嫁前に六条院には正妻は不在であると判断され、またその状態はかえつて独自の「一世源氏」の好みや六条院世界の特徴をきわだたせている。ではこの正妻不在の状態を光源氏自身はどう考えていたのか。

女三宮の婚選びに際して乳母に左中弁が、光源氏から聞いたのだ

として語る部分、

「……さるは、『この世の栄え、末の世に過ぎて、身に、心もとなきことはなきを、女の筋にてなむ、人のもどきをも負ひ、我が心にも、飽かぬ事もある』となん、常に、うちくのすさびごとにも、おほしの給はするに、げに、おのれが見たてまつるにも、さなんおはします……」<sup>⑧</sup>（圈点・傍線は松田による）

のgについては諸説あるが、光源氏が永遠の思慕の対象である藤壺のことを念頭におきつつ六条御息所や朧月夜との交渉が不本意な結果になったりしたことを「すさびごと」のうちに語るのを左中弁が聞いたのだと解釈したい。歴とした嫡子夕霧の母葵上が死去したので新たな嫡妻を求めているとも考えられるが、女三宮の懐妊を知つても光源氏はそれほど喜んでゐる様子に描かれていないので嫡妻願望の解釈も除いてよいだろう。さらにhから明らかなようにこの叙述は伝聞形式なので「さなん」の「さ」の内容とは左中弁の見解、つまり「準上帝光源氏にふさわしい身分の方が正妻としておいでにならない」という世俗的価値観による光源氏評、六条院世界評に変容して、同次元で乳母に共通理解されてゆく。

以上のことから光源氏は正妻、嫡妻を求めるゆえに女三宮を求めたのではなく、公の婚儀を経ることによつて結果的に女三宮を正妻格とするに至つたといえる。あえて「格」と附したのは内親王の婚

儀の実態に關して史実上、不明な点を残すからであり、また物語で女三宮は降嫁後も「二品」に昇格するなど内親王としての性格をもちつつけているからである。女三宮の六条院入りの儀が入内の形態に基づき、かつ準太上帝の光源氏はあくまで臣下として処していることや、逆に完全に女御入内の様式に従って光源氏が「昼の通ひ」をしていることなど両者の結びつきが「めづらしき御中のあはひども」として描かれることは独自の「世源氏」の姿を強調している。

## 二、「片なり」の女三宮への光源氏の執着の意義

竹内美千代氏が整理されたように女三宮の性格については「おいらか」「おほどか」「幼し」「いはけなし」「何心なし」「もの深くは見えず」「いたり少なく」「心にくき所なき」「しどけなき心」「うしろめたし」「はかなげ」などの表現が散在し、容姿については「片なり」「いはけなし」「ささやか」「らうたげ」「うつくし」「あてやか」などの表現が在散する。このような形象について従来、「無性格」「幼稚性」として光源氏や紫上に格別劣る存在だとみなされたり、「空虚な宮廷世界そのものの象徴」、後の柏木の犯しを可能にするために必要であった思慮深くない女性と説かれたりするのにとどまっているが、この形象には光源氏との関係からもっと積極的意義を見出すべきではないか。

朱雀院が光源氏に頼りなげな女三宮を育むことを依頼し、かつての若紫にあやからせたいと願うのに呼応して光源氏もまた女三宮が「紫のゆかり」であることに心惹かれてゆく、というように養育の意味を含めて降嫁が成立してゆく。ところが奇妙なのは女三宮は血縁的には藤壺のゆかりであっても「似る」という根本的な点では真の「紫のゆかり」ではないことが降嫁直後に光源氏の裡で確認され、紫上と女三宮を比較するにつけてその失望が深まり、降嫁承諾を後悔するようでありながら女三宮に執着してゆくことである。女三宮が「二品」に昇格した頃、紫上への渡りと等しくなったり、紫上や明石姫君にも伝授しなかった七弦琴を異常なほど熱心に伝授したりする奇妙な執着の理由は、光源氏が朱雀院や春宮を顧慮して「あずけ給へるしるし」、つまり養育成果を示すために七弦琴を伝授したからというだけだろうか。

武者小路辰子氏が女三宮は「光を愛さなかった理解しがたい新造型」、「つねに痛むしさがつきまとい、さげすみつつさげすみきれない重たさ」がある存在だと指摘されたように、柏木の犯し以後でさえも光源氏の執着をかきたてることは、女三宮と光源氏の本質的な意味でのつながり方を示唆してはいないか。

鈴虫の宴ですでに出家した女三宮に対し「なほ、おもひ離れぬさま」を告げる光源氏に拒否の姿勢を示しながらも「空をうちながめ

て、世の中さま／＼につけて、はかなく移りかはる有様も、おぼしつづけられて、例よりも、あはれなる音にかきならし給ふ」光源氏の七弦琴に女三宮は「なほ心いれ給へり」としみじみ聞きいる場面④に注目したい。ここでは本論一の①で述べたように、登場前から他の女達の空虚な思いを象徴するべく造型されていた女三宮が柏木の犯しを経て生身をもってその思いを知り、「片なり」にしては意外なほどかたくなに「うき世にはあらぬところ」⑤、「人ばなれたらむ御住まひ」を希求するに至ったことが示されている。また逆にそのことよって光源氏との間に深い交感が生まれるようになったといえる。さらにこの交感の内実は両者不可分なものとなって、光源氏の「今宵のあらたなる月の色には、げに、なほ、我世のほかまでこそ、よろづ思ひながさるれ」⑥という感慨に浸潤してゆく。

ここで鈴虫の宴に類似した朝顔巻の場面が想起される。光源氏の熱情を「ありし世は、みな夢に見なして、今なむさめて、はかなきにや」と拒否する朝顔に「げにこそ、さだめ難き世なれ」と光源氏が共感してゆく。⑦この朝顔の思いは過去を夢のように思うというのではなく、自ら夢と見なす、つまり夢だとき離すことによる「今なむさめて」という一種の覚醒した意識である。過去から現在へと連続する思いの中でのたゆたいやたんなる無常感ではなく、すでにこの世を隔てたところに心をおいている諦観ともいえようか。両者

の共感ほさらに「雪まろばし」の場面での光源氏の「時／＼につけて、人の、心をうつすめる、花・もみじの盛りよりも、冬の夜の澄める月に、雪の光りあひたる空こそ、あやしう、色なきもの、身にしみて、この世のほかの事まで思ひ流され、面白さもあはれさも、残らぬ折なれ……」⑧という感慨に連続してゆく。

この二つの場面に共通するのは、男女の愛執やみやびの美意識をこえたところでの交感であり、その内実はこの世の事象を相対化する諦観であろう。六条院世界が構想される直前の朝顔巻にかいま見られるこの諦観が、栄華を極めた後に女三宮によって再びもたらされるという物語の展開構造こそが、女三宮に対する光源氏の奇妙な執着の示唆している両者の本質的な意味でのつながり方ではないか。

三、まとめと今後の課題——本質的な主題について

従来、女三宮を六条院の夾雑物ととらえ、降嫁を契機に『源氏物語』を一部・二部と区切り、二部は六条院世界の崩壊や光源氏の否定を描くとする説が多い。しかし物語の政治的側面では六条院は冷泉朝の権威と次代の国母となるべき明石姫君、明石姫君の後見的立場となった嫡子夕霧と養女玉鬘の夫・髪黒との連繫体制など、さらなる栄華への基盤を獲得している。女三宮降嫁過程には桐壺巻以来の朱雀院と光源氏の確執の中で朱雀院の弱体が確認されると同時に、

「冷泉帝という源氏の血の流れを受ける皇系そのものが、女三宮という他の皇系を自己の側に吸収することにより、自己の皇系の拡大存続を図るといふあり方を意味する」<sup>53</sup>は、ずである冷泉帝後宮への女三宮入内案を光源氏が自ら撤回するといふ構図が見られる。その根底には、帝位に即くことを起えるほどの資質をもちながらも即位しえないという独自の「一世源氏」のあり方が脈うっている。つまり、光源氏、六条院世界は皇系そのものではなく皇系と緊張感をもった相関関係においてこそ輝くものだとする「物語の論理」が一貫することを重視するべきではないか。政争は如実に描かれないが、当時の摂関家の勢いを髣髴とさせるリアリティをもつという点では「摂関政治」といふものを初めて概念化した「虚構世界」といえよう。しかし、それは物語の表層における周到な方法であり、比類なき栄華獲得の道を描くことが本質的な主題ではない。従って物語が摂関家や皇家を相対化し批判しているかどうかの問いは空しい。

様々な範疇や次元での主題を読みとれる幅をもつこの物語は、いわば終曲部のない重奏曲であり、その最も低音階（主軸部）の主旋律が「物語の論理」である。リアリティをもつて現実世界を再構築した物語世界に、独自の「一世源氏」の優越性を確認することを物語展開の核にする「物語の論理」を一貫させることによって物語の意志ともいべき自律性が生まれている。従って主軸部にかかわる

人物は史実の特質をふまえた上で「物語の論理」にそくした独自の造型にされている。また一方、この自律性ゆえに『源氏物語』はそれ自体で完結する（描きつつ消されてゆく）性質をもつこととなり、おそらく当時の現実社会に対して積極的に批判するような影響力はなかったであろう。

「物語の論理」と女三宮造型の関連について次の二点にまとめられる。一、「物語の論理」にそくした女三宮造型——①当時の宮廷女性としては自己の存在に深い不安を抱いていたと考えられる歴史社会的な面での内親王の特質がふまえられた女三宮は、若菜巻までに登場した他の女達の空虚な思いを象徴するべく造型されている。

②若菜巻冒頭は桐壺巻冒頭と照応しつつも皇位継承からんだ緊張感が欠如し、母妃の立后計画も窺えぬという点で異質である。この設定の意義は①を典型的に女三宮造型に生かし、しかも桐壺朝と対比して朱雀朝の弱体を確認することにより、登場前の女三宮に決定的な不安を強調することである。③史実の婚姻形態から考えて女三宮降嫁前に六条院には正妻は不在であると判断でき、またその状態はかえって独自の「一世源氏」の色好みという一種の価値観や六条院世界の特質をきわだたせている。光源氏は正妻、嫡妻を求めぬゆえに女三宮を求めたのではなく、公の婚儀を経ることによって結果的に女三宮を正妻格とするに至ったのであり、内親王の性格をもち

つづける女三宮との婚儀の実態が「めづらしき御中のあはひども」として描かれることは独自の「二世源氏」の姿を強調している。二、柏木の犯し以後でさえも「片なり」の女三宮が光源氏の執着をかきたてることは、女三宮と光源氏の本質的な意味でのつながり方を示唆する。つまり柏木の犯しを経て生身をもって空虚な思いを知った女三宮と栄華をきわめた光源氏の間にも男女の愛執やみやびの美意識をこえたところでの交感が生まれ、共にこの世の事象を相対化する諦観に浸るといふ鈴虫の宴の場面でのあり方である。

重奏曲のようなこの物語のより本質的な主題は旋律にならぬ旋律として奏でられるもので、思想にいたっていない抒情性を帯びた感慨、諦観だと思われる。それは物語の時間が静止し、物語の事象や時間が凝縮され、とぎすまされるかのような場面において近く聞かえてくる。光源氏が「この世のほかの事まで思ひながされ……」と語る場面、すなわち六条院の構想が具体化される直前の朝顔巻と栄華をきわめた後の鈴虫巻で物語は光源氏をとおして底部から深い溜息をつくように、その深淵をかいま見せる。この意味では『源氏物語』に主人公はいないともいえよう。

さて、『物語の論理』にそくして造型された女三宮が柏木の犯しを経て、このような本質的な主題が奏でられる状況に光源氏を導くことを重視すると、犯しによって懐妊された薫はたんに柏木の胤であ

るにとどまらず薫の造型の中にすでに諦観が胚胎させられていることを示唆すると思われる。

『物語の論理』と虚構世界との関係が近現代文学の手法と比較してどう評価できるのか、また、紫式部が『物語の論理』という手法を用いた理由や現実認識との関連はどうなのかという観点からも今後、検討したい。古典文学の主題、抒情性の質、手法などについて可能性と限界性を見究める姿勢でのぞみたく思う。

## 注

- ① 拙稿『源氏物語』にみる物語論理——女三宮降嫁をめぐる——（同志社国文学第21号所収）で詳しく述べた。
- ② 皇親の種別や名称については『皇室史の研究』竹島寛著に従った。つまり皇親の皇兄弟姉妹及び皇子・皇女を親王・内親王と称し、皇孫・皇曾孫・皇玄孫の四世までを王・女王と称す。五世は王名を得るが皇親とはならないなど。
- ③ 第一巻P61帯木巻、以下本文引用は全て岩波古典文学大系所収『源氏物語』全五巻による。
- ④ 今井源衛氏「女三宮の降嫁」文学S30・6。
- ⑤ 角田文衛氏『日本の後宮』を参照した。平城帝なども朝原内親王や大宅内親王を妃とし、嵯峨帝も高津内親王を妃にしているが、これらは多分にお義理による入内の傾向が強く、寵愛もなく、無論、皇后に冊立されることはなかった。淳和朝の正子内親王（嵯峨帝皇女）の立后には嵯峨帝の皇太后・橘嘉智子の力が背景になっている。陽成朝の綏子内親王（光孝帝皇女）については基経の策略により、退位を強制された陽成帝が光孝帝、宇多帝に反抗的であったために基経死後、光孝帝は源綏子を内

親王とした上で陽成上皇に納れて和睦を図ったという。

醍醐朝への宇多上皇の同母妹・為子内親王（光孝帝皇女）の入内に対し、時平が穩子の入内を図るが宇多上皇の生母・班子女王の反対に遭い実施しなかった。しかし為子内親王は出産のため薨去したので時平は独特の政治的手腕をたちまち穩子を入内させた。

朱雀上皇の鍾愛と後顧を受けた昌子内親王が冷泉朝の皇后となっていくことは摂関家が娘を后にと野心を燃やす中では異例とされるようになった。が、昌子内親王には御子がなく、ほとんど里第籠居していたらしい。円融朝の尊子内親王（冷泉帝皇女）も兼家の娘詮子などに圧倒されたことは推察しうる。

⑥ 平安朝に女帝はなかったのだ。

⑦ 摂関家の娘達は政治的道具として翻弄されていても、彼女達の主観においてとはともかく客観的には血統の拡大に参与する可能性が大きかったという点で内親王よりは存在意義が見られる。

⑧ 注④に同じ。

⑨ 石田穰二氏「若菜の巻について」『源氏物語論集』所収。

⑩ 詳細は拙稿（注①）を参照されたい。

⑪ 藤原穩子の立后以来、中宮⇨皇后であったものが一条朝の定子入内を契機に区別されるようになり、さらに彰子入内によって定子皇后宮、彰子中宮とも一条帝の嫡妻であり、身分と差別なしという一帝二后併立の新例が生まれた。これは背後の藤原氏の策動を示すものである（富田節子氏「平安時代中期における立后事情と外戚関係」日本女子大紀要文学8を参照した）。が、『源氏物語』では中宮⇨皇后の概念があることに注意すべきである。また官女にすぎぬ尚侍が皇妃への可能性を孕みつつある過渡的段階（藤原綏子）から進んで、道長は三女四女を次々と皇妃候補として尚侍に就任させている（後藤祥子氏「尚侍致——臘月夜と

玉髪をめぐって」日本女子大文学国語国文学論究S42・5及び注⑤を参照した）。が、『源氏物語』での尚侍の概念は中宮の概念と同様に道長期の史実とおりではなく、流動的な面を臘月夜の造型に生かし、玉髪的造型には実務的な面を重視している。詳細は拙稿（注①）を参照されたい。

⑫ 第一卷P395賢木巻、第二卷P37須磨巻、女御、更衣ではなく「おはやけさまの宮仕へ」と朱雀帝は考えている。

⑬ 第二卷P20須磨巻。

⑭ 注④に同じ。

⑮ 注⑤を参照した。

⑯ 柏木の言葉より女三宮が下臈の更衣腹であり、皇女とはいっても女三宮とはまた別だと考えていることが窺え、朱雀院も女二宮の出家を諫止するなど、女三宮に比して冷遇している。

⑰ 第三卷P211~212若菜上巻。傍線は女三宮の母・藤壺女御に関する叙述。傍線は朱雀院に関する叙述。

⑱ 森一郎氏「源氏物語の主題と方法」所収、「源氏物語の主題形成の作法」。

⑲ 林田孝和氏「物語空間と伝承——源氏物語第二部の始発をめぐって」、『源氏物語の発想』所収。

⑳ 注⑯に同じ。

㉑ たとえば「岷江入楚」（源氏物語古註釈大成より）には「弄、後の事をいふ朱雀の御代には立后なくて過したり、秘、立后も有へき人なれともさもなきとなり、総して朱雀の御代には立后なし、其故は内侍のかみこそ立后有へき人なるを源と名を取（の立イ）給故に只宮仕にて立后なきなり其外には可然人も参り給はざる故なり」とある。他、「細流抄」「湖月抄」「新釈」『岩波古典文学大系』『源氏物語評釈』（玉上琢弥著）なども立后のことを指摘する。

- ②② 朱雀院が承香殿女御から女三宮が継子扱いされるのではないかと危惧を抱いていることから窺える。
- ②③ 第一巻p 33桐壺巻。尚、史実では一条朝に円融上皇の皇后として、かつての「素腹の后」(中宮藤原遵子)が御子がないままであらためて冊立されている。この背後には摂関家頼忠、兼家、道隆らの争いがあり、また皇后遵子、皇太后詮子ともに配偶関係は円融上皇であるから、つまり一法皇二后併立と言うべきで(富田節子氏「平安時代中期における立后事情と外戚関係」日本女子大学紀要文学8による)、この時期に中宮と皇后が区別されてくると併せて『源氏物語』の王朝に直結できない問題は残る。しかし、物語で朱雀帝の退位と同時に女三宮の母妃が死亡したわけではないのだから朱雀院に独自の力が附与されているなら母妃を立后させることも不可能とは思えない。ところがそうは描かれず、弘徽殿大后の妹・臘月夜尚侍に傾いてゆくところに、朱雀院が弘徽殿大后と同次元にある弱体ぶりが明確になっている。
- ②④ 第二巻p 23須磨巻。
- ②⑤ 秋山虔氏「紫上の変貌」『源氏物語の世界』所収。
- ②⑥ 高群逸枝氏「招婿婚の研究」所収第六章第五節「前婿取婚の人数」より要約した。
- ②⑦ 南波浩先生の御教示による。「光源氏は四十九日の仏事を比叡山の法華堂で行っているが、当時の権力者、寺社関係の貴顕の時に行われた例としては左大臣時平の正妻の場合がある。しかし光源氏は正妻葵上の死後は法華堂で行っていない。ゆえに夕顔への思い入れの深さを示している」とされる。
- ②⑧ 桐壺院が光源氏に六条御息所の処遇の件で訓誡もしている。第一巻p 318葵巻。
- ②⑨ 注②⑥を参照した。
- ③① 第一巻p 51桐壺巻。尚、夕顔に感傷した際に二条院へ連れてゆこうとすることは夕顔もまた光源氏にとって「思ふやうならむ人」の一人であったと考えられる。玉鬘を六条院に迎える際にも「夕顔のような女性がないので」と語っている。
- ③② 第三巻p 22若菜上巻。
- ③③ 紫上、花散里には御子がないので問題にできない。本論での「嫡妻」とは道長時代のその意で妾妻と区別されたものとする。
- ③④ 桐壺帝が先帝の四宮・藤壺を迎え入れた時には婚儀の様子は描かれていないことなど。
- ③⑤ 第三巻p 246若菜上巻。
- ③⑥ 第三巻p 255若菜上巻。
- ③⑦ 竹内美千代氏「女三宮」『源氏物語講座』第四巻所収。
- ③⑧ 大朝雄二氏「女三宮の降嫁」『源氏物語正篇の研究』所収。
- ③⑨ 野村精一氏「若菜巻試論——人間関係の悲劇的構造について」『源氏物語の創造』所収。
- ③⑩ 深沢三千男氏「女三宮について」『源氏物語の形成』所収。
- ④① 「六条のおとど、式部卿のみこのむすめおほし立てけんやうに、此の宮を預かりて、はぐ、まん人もがな」(第三巻p 219若菜上巻)。
- ④② 「さるべき契りをははし、えさらぬことには、ぐ、み聞ゆる御守り目侍るなん、うしろやすかるべき事に侍るを」(第三巻p 236若菜上巻)。
- ④③ 第三巻p 335若菜下巻。
- ④④ 第三巻p 339若菜下巻。
- ④⑤ 第三巻p 356若菜下巻。
- ④⑥ 武者小路辰子氏「女三宮像——幼さへの設問——」日本文学S 49・10。
- ④⑦ 第四巻p 82鈴蟲巻。
- ④⑧ 第四巻p 84鈴蟲巻。

- ④⑧ 第四卷 P 57 横笛卷。  
④⑨ 第四卷 P 83 鈴蟲卷。  
⑤⑩ 第四卷 P 85 鈴蟲卷。  
⑤⑪ 第二卷 P 253 朝顔卷。  
⑤⑫ 第二卷 P 266 朝顔卷。尚、「思ひながす」の用例は鈴蟲卷と朝顔卷の二例のみ。  
⑤⑬ 石津はるみ氏「若菜への出発——源氏物語の転換点」国語と国文学 S 49・11。  
⑤⑭ 清水好子氏『源氏物語論』所収、第七章「源氏物語執筆の意義」より。